

【短縮版】障害とパフォーマンス・アーツ研究会<第4回>議事録

日時：平成28年10月11日（火）14：00～17：00

会場：アーツカウンシル東京 大会議室

内容：ロンドン UNLIMITED2016 視察報告、意見交換

1. 参加者紹介（新規参加者のみ抜粋）

- ・ NPO法人シニア演劇ネットワークの副理事、遠藤いづみ。代表は鯨エマ。かんじゅく座という65歳以上のシニアによる公演を、毎年1回、ゴールデンウィークに行う他、隔年で全国シニア演劇大会を開催。去年は仙台、来年は福岡で開催。
- ・ 東京芸術劇場の事業企画課事業第一係でコンサートホール担当の係長、出口マミ。人材育成担当を兼務。同劇場の鑑賞支援担当の松岡智子。
- ・ スロームーブメントの総合演出、栗栖良依。
- ・ KATT神奈川芸術劇場の澤藤歩。アンリミテッドのフェスティバル視察に参加した。
- ・ フリーランスのキュレーター、田中みゆき。障害にかかわるパフォーマンス、展覧会、書籍なども手掛ける。アンリミテッドのフェスティバル視察に参加した。
- ・ シアタープランニングネットワークの小川まき。福祉施設を巡演し障害者などに演劇鑑賞機会を提供するホスピタルシアタープロジェクトを実施。

2. UNLIMITED（アンリミテッド）2016 視察報告（佐野）

（1）アンリミテッドの概要

- ・ ロンドンオリンピック・パラリンピックを機として、2009年から2012年に、障害のあるアーティストの活動支援を目的とするアンリミテッドが実施された。プログラムは①障害のあるアーティストによる作品制作の委嘱と資金助成、②制作に必要なアーティスト、プロデューサー、アクセスワーカー等の人材育成、③制作された作品の上映や展示のためのフェスティバル開催、④制作委嘱された作品の国際展開の4つ。
- ・ 後に「第1ラウンド」と呼ばれるこの4年間の予算300万ポンドは、オリンピックの宝くじ、アーツカウンシル・イングランド、アーツカウンシル・ウェールズ、

ブリティッシュ・カウンシル等が拠出。成果としては、ロンドン2012カルチュラル・オリンピアドの主要プログラムの1つとして、パフォーマンス・アーツの新作29作品が発表された。

- ・ 車椅子を水中に沈めてパフォーマンスをしたスー・オースティンのウェブサイトは2,400万ビューを記録。大きなインパクトを与え、障害者に対する見方を変えたと言われる。
- ・ 英国では1970年代後半から障害者の人権運動が盛んで、障害者芸術のムーブメントも育ち、80年代には意義深い活動をするアーティストがすでに一定数存在していたという背景がある。
- ・ アンリミテッド・フェスティバルの成功を受け、アーツカウンシル・イングランドとブリティッシュ・カウンシルは、第2ラウンドとして2013年から2016年にプログラムを継続。さらに先ごろ、第3ラウンドとして2017年から2020年の継続を決定した。第2ラウンド以降は、障害のあるアーティストの活動を一般のアーツ・シーンに売り込み新しい観客層を開拓して、障害のある人に対する見方や認識を変化させることを目的に、障害のあるアーティストに作品制作を委嘱して、英国内外で発表する活動を展開。
- ・ 2014年が第2回、今回が第3回のフェスティバル。予算は、第2ラウンドが150万ポンド。第3ラウンドは180万ポンドに増額が決まった。
- ・ ①「メーン」：プロフェッショナルに確立したアーティスト／カンパニーに対する支援、②「インターナショナル・コミッション」：プロフェッショナルに確立したアーティスト／カンパニーと国外の障害のあるアーティストによる国際共同制作、③「エマージング」：新進・若手アーティストに対するプロセス重視のプログラム、の3カテゴリーが設けられている。助成金額が最も大きいのは②。③では作品制作や最終的な成果を必ずしも問わない。
- ・ 「プロフェッショナルに確立したアーティスト」の定義は、作品が広く社会で知られ、メディアや観客から確かな批評や反応を受けていること。必ずしも経済的に自立しているという意味でない。
- ・ 障害のあるアーティストが主導していること、アーティストがクリエイティブ・コントロールを持っていることの2つが絶対条件。研究開発からスタートして、その成果をもとに作品を制作することもできる。資金提供だけでなくアーティストの先

進的なマインドづくりやリーダーシップのトレーニングなどの側面支援も行われる。

(2) アンリミテッド・フェスティバル2016の概要

- ・ 9月に、ロンドンの文化施設サウスバンク・センターと、グラスゴーの2か所でアンリミテッド・フェスティバル2016が開催された。
- ・ ブリティッシュ・カウンシルの視察プログラムで、KAT T 神奈川芸術劇場、インディペンデント・キュレーター、豊島区のアうるすぽっと、国際交流基金、日本財団ソーシャルイノベーション本部、川崎市市民文化振興室の方々と共に、日本から7名で参加。東アジア各国からの参加者を含め計40名のデレゲーションで、ロンドン会場を1週間視察した。
- ・ サウスバンク・センターはテムズ川の南側、サウスバンク地域にある。1951年設立の英国を代表する複合文化施設で、第1回からアンリミテッド・フェスティバルの会場。クラシック音楽、ロック、ジャズ、ワールドミュージック、演劇、ダンス、美術など幅広いプログラムを実施し、英国芸術の殿堂とも言われる。アンリミテッドはサウスバンク・センターが年間40件開催するフェスティバルの1つという位置づけ。
- ・ サウスバンク地域はアートの集積エリアで、シェイクスピア・グローブ座、ナショナル・シアターなど演劇専門の劇場や、現代アートのテート・モダンなどがテムズ川沿いに並ぶ。観光地でもあり、多くの人々で賑わう憩いの場。(映像) サウスバンク・センターの入り口には「世界のフェスティバル、ウェルカム・トゥ・サウスバンク・センター」とメッセージがある。劇場のカフェテリアには平日でも人が集まる。リラックスした時間を持てる劇場環境があることに感銘を受けた。
- ・ サウスバンク・センターの芸術監督ジュード・ケリー氏は、ロンドンオリンピック・パラリンピックの初代文化教育委員会の最高責任者を務めたイギリス文化政策の大御所。「英国博覧会の基本方針に戻って、サウスバンク・センターを、人々に開かれた、芸術を通して人間性が称賛されるフェスティバルの場にしたい」、「劇場で上演される物語とホワイエや客席に集まっている一人一人の物語は等価である。それらを同じように扱っていきたい」と、インタビューサイトで語っている。こういう人物が芸術監督を務めていることも、2012年にアンリミテッド・フェスティバルが開催され継続している背景にあるのだろう。

(3) イギリスの障害のある俳優の活動状況

- ・ ナショナル・シアターの『三文オペラ』で、ストリートギャングの役を脳性麻痺の車椅子の俳優が演じていた。英国には俳優組合エクイティがあって、障害のある人を含め俳優たちが団結して、賃金や労働条件、労働環境の整備などを劇場と交渉し、メディアにアピールしている。この組合には障害者委員会があり、障害のある俳優の権利獲得と活動の場の拡大のための交渉を行っている。こうした組織があるからこそ、また長年、障害のあるアーティストが活動してきた背景があるからこそそのキャスティングだと思われる。
- ・ これは必ずしも闘いや交渉だけの成果ではなく、アーツカウンシル・イングランドのダイバーシティ戦略も大きく影響している。ナショナル・シアターが活動資金の6割を頼るアーツカウンシル・イングランドは、2010年からの10年間で実現すべき5つの戦略的目標の1つ「ダイバーシティとスキルズ」のゴールとして、「美術館、博物館、図書館等や、リーダーシップを発揮して働く人々が、多様性を保障するための適切な技術を持つこと」を掲げる。この方針のもと、劇場はさまざまな形で多様性の保持、障害者の芸術活動の促進などに取り組んでいる。

(4) フェスティバルにおけるパフォーミング・アーツのプログラム

- ・ アンリミテッド・フェスティバルのハンドブックは、弱視者への配慮から、黄色い背景に黒い大文字のデザイン。作品についてのみ書かれていて、障害には敢えて触れていない。
- ・ 看板演目「安楽死ミュージカル」は、リズ・カーという車椅子の女性の作・出演。知名度の高い俳優でありコメディアン、作家、障害者の権利活動家。末期の病人や障害者の安楽死の合法化をめぐる英国の時事問題をテーマとする作品。英国議会で2015年9月に安楽死を合法化する法案が圧倒的多数で否決された。しかし、その前の世論調査では8割の英国国民が、末期の病人、障害者等の安楽死は人道にかなった選択と答えていたので、障害のある人々の間では合法化への危機感が募っていた。こうした時事的な問題を、風刺に満ちたユーモラスなミュージカル作品に仕立てた。外国人が安楽死することも受け入れるスイスへの安楽死ツアーにリズが参加して、死に行く人たちをシニカルにリポートするストーリーに、歌と踊りを挿入。ボードビルのシーンあり、ドラマチックなバラードが織り込まれるなど完成度の

高い作品で、終演後は拍手喝采だった。リサーチやワーク・イン・プロGRESSを重ね、制作に5年をかけたという。

- リズは劇場広報紙のインタビューで「障害のようなダークとかタブーとされる問題を敢えて笑うことが自分にとって重要だ。身体障害の世界に生き、全ての厄介、難しい問題を笑ってきた自分にとって、この作品は人生そのものだ」と語る。
- 舞台専門のサイト「ザ・ステージ」はこの公演について、「リズ・カーは大変な才能の持ち主で、たっぷりのミュージカル形式で、語るのにぎこちない複雑な問題をやわらげつつ心に訴える、熱情あふれる作品にした。ロングラン上演に値する作品」と評価しつつ、音楽が録音であること、音響や照明の技術面で粗さが気になるとして星3つをつけた。
- クレア・カニングムは、下半身が少し不自由で杖を使うダンサーで、英国を代表するアーティストとして国際的に活躍。アメリカ人ダンサー・振付家のジェス・カーティスのもとで2008年にムーブメントを始め、アンリミテッド2012ではカンドゥーコと共同制作をした。今回の「ザ・ウェイ・ユー・ルック（アット・ミー）トゥナイト」（今夜のあなたの（私の）見方）は、人間が世界を知覚する行為や習慣について舞台上でクリアとジェスが対話し、時に観客に語りかけながら進行するパフォーマンスに、音楽と映像を挿入した知的な作品。「これは社会的な彫刻作品、2人のパフォーマーと観客のための感覚の旅である」という。認知哲学の専門家をコンサルタントに招いて、サンフランシスコに長期滞在して作り、2015年12月アメリカでのプレビュー公演を経て、今回の本公演に至った。（映像）杖をついて下半身を浮かせて動くのが彼女独特のメソッドで、下半身の浮遊感、動きの滑らかさに目を見張らされた。
- カンドゥーコダンス・カンパニーは1991年にアダム・ベンジャミン、セレステ・ダンデガーによって設立された、障害のある、そして障害のないダンサーのプロフェッショナルなインテグレイテッド・ダンス・カンパニーの草分けとされる。「ユー・アンド・アイ・ノウ」（あなたと私は知っている）は、愛をテーマにした男女のデュエットで、15分間と短い作品。（映像）
- 注目作品とされるシーラ・ヒルの「ヒム」は、ティム・バーロウという高齢男性の一人芝居。作家だったシーラは30年前に事故で重傷を負い、10年間入院生活を送った後に作家活動を再開。ティムは、20代に戦場での発砲で耳が聞こえなくな

り、人口内耳をつける俳優。兵士時代の自叙伝的な一人芝居が高い評価を受けた。シーラとティムは20年来の友人。「ヒム」は、2人の中で実際に交わされた、子ども時代の記憶、老化、演劇に関する会話をもとにしたモノログ作品。シンプルな舞台に俳優が座って詩的なせりふを語り、スクリーンに映像作家の作品を映し出す、ウッドベースの演奏など、1時間程のシックな作品だった。

- ・ 「スタンドアップ・シットダウン・ロールオーバー」(立って、座って、転がれ)のジェス・トムは、1日に1万6,000回「ビスケット」と言わずにはられない、神経作用を自分でコントロールできないチック症を持つ。作家、コメディアン、半分ふざけて資金調達の専門家、パートタイム・スーパーヒーローと自称する。2012年に発表した「ビスケットの国」は自ら症状(トゥレット症候群)からトゥレット・ヒーローというキャラをつくった作品で、追加公演を行うほどの人気だった。今回は初めての一人芝居の、初期のワーク・イン・プログレス。(映像)
- ・ アンリミテッドのウェブサイトで閲覧できる第2ラウンドの簡易な評価報告書で、ジェスは自分がアンリミテッドで支援されて、粗末なビスケットからどう変化し、成長してきたかを語っている。「障害のある人と一般の文化セクターの両方からサポートを受けたことが嬉しかった。自分はアーティストとして尊重されている、表現活動でもっと冒険していいのだと勇気づけられた」というコメントが印象深い。また「ツアーで公演を重ねてたくさんギャラを得たので、自分用の特別仕様のバン、トゥレット・ヒーロー号を手に入れた」とエピソードを披露。
- ・ リー・リドリーは、BBC「ニュー・コメディ・アワード」で優勝経験を持つ、脳性麻痺のコメディアン。「ロスト・ボイス・ガイ・ディスアビリティ・フォー・ダンス」(声を失った男、のろまのための障害)は、本当に話すことができないのか、悪魔払いをしたほうがよいのでは、どんな性生活を送っているのか等、彼が実際によく聞かれる質問に自ら答えるワンマンショー的な作品。(映像)人の声なのか、機械音声なのかわからないが、リー自身はしゃべっていない。反応が良く、客席に笑いが続いていた。
- ・ ジャック・ディーン「グランダッド・アンド・ザ・マシン」(おじいちゃんと機械)は、SFのサブジャンルの世界観をもとにして、混乱に陥った国を救うために100歳の機械のモンスターに乗っておじいちゃんを探しに行くというストーリー。50人ほどの小さなスタジオで上演。クオリティの高い作品だった。

- ベッキ・ペリマンの「ドアウェイズ・プロジェクト」(戸口プロジェクト)は、作家自身が体験した路上生活を描写したサウンド・インスタレーション。ホールの周辺にスピーカーが設置され、ホームレスのさまざまなモノローグが流れた。
- ショーン・ゴールドソープの「1100万の理由」は、コミュニティダンス団体の協力を得て制作したもの。有名な映画のダンスシーンを、聞こえない、ないしは障害のあるダンサーによって再創造した写真作品群をサウスバンク・センターのロビーで展示した。彼らの踊るエネルギー、創造力、多様性を祝福し、人々の視線を変えることを目的とした作品。
- 日本から、大阪の知的障害者の生活介護施設アトリエコーナスの3人の作家のアウトサイダー・アート作品が招聘された。昨年、大阪を訪れたジョー・ヴェレントが作品を見て、クオリティの高さに感銘を受けたと聞く。ジョーは「作品を商品化し流通させてアーティストの収入につなげる試みは、英国より進んでいる」と日本の障害者美術を評価していた。
- 「オスカ・ブライツ短編映画祭」は、学習・知的障害のある人による短編映画の国際フェスティバル。アニメーションと音楽ビデオ作品の上映会もあった。
- 「ビューティフル・オクトパス・クラブ」は以前からサウスバンク・センターが主催していたプログラム。知的障害のある人に芸術活動への参加や才能を伸ばす機会を提供するチャリティー団体の無料イベントが同時開催されていた。(映像)「ハート・アンド・ソウル・クワイア」は、障害のある人、子どもと大人、いろいろな民族の人の混声合唱団。
- 「アンリミテッド・インクルーシブ・ユース・ダンス・プラットフォーム」は、サウスバンク・センターが主導して開催した初のダンスイベントで、コミュニティベースの裾野を広げる活動。英国各地の若手のインクルーシブ・ダンス・カンパニーが、イベント形式で自分たちの作品を次々と披露した。カンドゥーコが若手育成として指導しているグループ「カンドゥ2」が10団体のトリとして発表した。(映像)
- このイベントの開催に向けて、「アンリミテッド・フェスティバル・メーカーズ」という人材育成プログラムも実施された。プロデューサーを目指す18歳から30歳までの障害がある、聞こえない、ないしは病気とともに生きる若者12名が、予算管理、スケジューリングなど制作者の仕事をプロのプロデューサーについて実地で学び、各チームをプロデュースした。

(5) フェスティバルにおける鑑賞支援

- ・ 情報保障の取り組みの先進事例として、音声解説を演劇公演にパフォーマンスとして組み込んでしまう試みなどが紹介されていた。
- ・ サウスバンク・センターのアクセスは2012年のアンリミテッド主催以降、大幅に向上し、劇場スタッフに意識改革が起きた。会場ではアクセスマップが無料で配布され、対面で相談のできるインフォメーションデスクが設置されていた。
- ・ 鑑賞のためのアクセス情報は「アシステッド・イベント」としてガイドブックに掲載される。英語の手話通訳、字幕、音声言語の文字化などがマークで示されている。RP（リラクストド・パフォーマンス）は自閉症など心身の障害でじっと見てられない人たちが家族や友人たちと心置きなく鑑賞できる公演。AD（オーディオ・ディスクリプション）は音声解説付きの公演。タッチツアーは、開演前に舞台上がって舞台セットや小道具を触ったりできるサービス。出演者やスタッフに作品について質問して答えてもらうサービスもある。手話通訳者は演技者としても優れている。(映像)ミュージシャンが演奏している前で手話通訳者が歌詞を通訳しているが、とても表現力豊かで、ずっと見ていたくなった。
- ・ (館内エレベーターの映像) マーティン・クリードのサウンド・インスタレーションで、視覚障害者の音声ガイドにもなっている。奇妙な音なので、居合わせた人と会話が始まったりするコミュニケーションアートでもある。アクセスサービスにクリエイティブに取り組んでいて感心した作品。
- ・ 近隣の劇場にも影響が広がっている。ナショナル・シアターは向う半年間の公演のアクセスサポートを一覧できる冊子を発行。字幕がつく日、音声解説がある日、タッチツアーがある日などが、演目ごとに記されている。

(6) フェスティバルの周辺状況、運営体制

- ・ カンドゥーコと並んで有名なインクルーシブ・ダンス・カンパニーであるストップギャップ・ダンス・カンパニーが、2017年2月からツアーを予定している新作を制作中で、派遣団のためにロンドン近郊でショーケースを行った。(映像)初めての演劇的な作品。妻を亡くした、下半身のない男性が、娘と残された居間で悲しみに暮れ、妄想にふけるという設定。娘役のダンサーにはダウン症があるが、ダンス・クラスの指導で生計を立てている。突然群舞が始まるシーンはダイナミックで目を

奪われた。完成が楽しみな作品。

- ・ アンリミテッドの運営は、障害のある人の文化へのアクセス向上に取り組む中間支援組織「シェイプ・アーツ」と、2013年以降は「アーツアドミン」というアーティストの中間支援団体が担う。聴覚と身体に障害のあるジョー・ヴェレント氏がシニアプロデューサー。シェイプ・アーツの代表トニー・ヒルトンによると、英国の障害者の活動は、1972年に結成されたUPIAS（隔離に反対する身体障害者連盟）が提唱したソーシャルメディアの考え方に支えられる。障害が個人あるいは医療に責を帰するものとされていたのに対して、課題は社会の側にあると提唱した。心身の機能的な障害は「インペアメント」、障害のある人の社会活動のメインストリームへの参加を妨げる活動制限や不利益、障害は「ディスアビリティ」と、言葉を使い分ける。障害のある芸術家の呼び名「ディスエイブルド・アーティスト」にも変化が見られる。「ディスアビリティ」には能力がない、奪われているといったネガティブな語感があることから、一人一人がいろいろな能力の持ち主「ミックスド・アビリティ」であるという考え方に、少しずつ移行している。劇場などでも「プログラム・フォー・ザ・ミックスド・アビリティ」といった表現に変わりつつある。
- ・ サドラーズ・ウェルズのラーニングプログラム「ホームグラウンド」は、高齢者、若者などさまざまなコミュニティグループが「サッカー」をテーマに6カ月間ほど各々ワークショップを行ってパフォーマンスをつくり、全てを統合しステージで発表する。ミックスド・コミュニティ・グループには知的障害者、エスニック・マイノリティーなど、さまざまな背景・年齢の人たちが集まる。地域のサッカークラブの子どももグループを作って参加。総勢100人、事業予算は1,500万円ほどのプログラム。ストラヴィンスキーの「春の祭典」を踊った1回目で、出演者の達成感、高揚感、エンパワーの効果が大きかったので、2回目として実施中という。

(7) ジョー・ヴェレントのコメント

- ・ 障害のあるアーティストを国際的な舞台に押し上げるための資金と、トレーニング機会の提供が2005年から始まり、2012年まで8年の準備期間をかけて、オリンピックの機にアンリミテッド・フェスティバルとして結実した。
- ・ アーティストへの創造活動支援だけでなく、インフラ、アクセスの整備が必要。
- ・ 報道の際に障害でなく作品が取り上げられるよう、メディアに働きかけることも必

要。

- ・最も重要なのは、障害のあるアーティストが自信をつけること。自分のストーリーを自信をもって語れるよう、マインド面のトレーニングが必要。
- ・以前は皆、福祉サポートで生活していたが、4人がフルタイムでアーティスト活動に専念できるようになったこと、地方の小さな会場から国際的なフェスティバルに発表の場が変わったこと、チケットが売り切れるようになったことなどが、アンリミテッドの成果。
- ・日本へのアドバイスとしては、①ハイレベルな活動をしているアーティストと組むこと、②才能・可能性を持つ障害者の所在に関する基礎調査を行うこと、③入り口となる活動を数多く行って具体的な手法を考案していくこと、④テクノロジーやデジタル技術を活用すること、⑤ストーリーを大切にし、目標設定を明確にすること。

(8) 所感

- ・日本社会には少子高齢化、若者の閉塞感、価値の均質化、異質なものの排除、弱者切り捨てなどの問題が山積する。日本では舞台芸術が十分な位置づけを得ていると言いきれない状況の中、障害のある人のパフォーマンス・アーツをどう位置づけ、何を目的に活動していけばよいか、よく考えていかななくてはならない。ロンドン五輪開会式でのホーキング博士の言葉「我々はみな違っている、そして、同じ人間の精神を分かち合っている」を噛み締めたい。

3. 意見交換

(1) 支援・振興の形

- ・経費の一部助成より、芸術団体に対するコミッション（制作委嘱）が望ましい。アンリミテッドのような組織が日本にもできて、専門家がアーティストや団体を選び、作品制作を委託するようになってほしい。（伊地知）→日本の舞台芸術界にまだコミッションという形が浸透していない。舞台芸術界全体で機運を高め、コミッション形式を定着させる方法を考える必要がある。（秋元）→確かに、全国の劇場やフェスティバルがコミッションしていく文化が必要。地域創造にコミッションのプログラムがあるが、もっと対象が広げられると良い。（伊地知）→地域創造は運営団体の基盤強化に取り組んでおり、フットワークも軽いので、働きかけていくと良い。（出口）

- 地域創造は文化芸術を通じた地域活性化という名目で事業を展開している。支援機関のミッションに即した文脈で事業企画をアピールする必要がある。(角南、佐野)
- ・ 文化庁の助成プログラムには障害者芸術のための特別枠がなく、日本ろう者劇団の視覚演劇は近年、助成を受けられず、苦しい状況にある。他団体も助成金無しで作品をつくりボランティアの手を借りて上演しているが、クオリティの高い作品を作り続けるのが難しいと聞く。文化庁とは別の助成制度を検討してほしい。(廣川) →文化庁の事業で障害者美術が対象になった背景には、関係者の長年のロビー活動があった。美術分野に比べてパフォーマンス・アーツは認知が進んでいない。(佐野)
 - ・ ろう者の演劇活動は日本でも80年代に活発になり、全国で数十の劇団がある。横のつながりを強めて、ろう者の演劇に対する認知を広げてほしい。(小池)
 - ・ オリパラに向けた助成事業の採択にあたって、ろう者団体が参加する演劇を求めているか。(小池) →ジャンルは広くて良い。障害種別で制約する方針はない。(佐野)

(2) ネットワーキング、新しい方向性

- ・ 2020年に向けたリーディングプロジェクトに、障害関係のパフォーマンス・アーツはまだないが、この研究会は、役割を分担してプロジェクトを立ち上げ、資金をつけるためのものか。(萩原) →純粋に情報交換とネットワーキングの場づくりのために始めた。社会支援の助成制度をレベルアップして予算を増やしたい。同じ目標を共有できるようになれば、個別には取り組みにくい事業を共同で企画し、計画中の公募事業に応募して、委託プロジェクトとして実施する可能性はある。(石綿、佐野、杉谷) →このネットワークを生かし、アイデアを出し合って何らかの形で一緒に活動したい。障害者の芸術活動に無関心な文化施設がまだ多い。全国の文化施設関係者が集まる催しやシンポジウムを組み込むなど、関心喚起の策をとれないか。厚生労働省や文化庁と一緒に訪問して、活動をアピールし要望を出し、可能性を相談するなどでもできると良い。(伊地知) →文化庁訪問を強く薦める。(出口)

(3) アンリミテッド・フェスティバル2016

- ・ イギリスの一般社会でアンリミテッドが広く知られている訳でないことを、念頭に置きたい。今回のフェスティバルでは、客層の違いが印象深く感じられた。注目演目以外では、関係者が大半だった。

- ・ 前回まではサーカス、バンドなど幅広い演目があったが、今回はサウスバンク・センターが主催しプログラミングしたためかイギリス演劇にかなり寄せられ、テキスト重視の演目が多かった。イギリスも、フェスティバルの見せ方を模索しているのだと思う。
- ・ 前回も今回も、フェスティバルの評価は行われていない。客層や海外の訪問者などについての統計も存在しない。サウスバンク・センターのアクセシビリティは良くないが、人の力でカバーしている。(以上、田中)
- ・ 車椅子の人、途中退出者、弱視者などを思うと、満席まで観客を入れるのが憚られ、会場のキャパシティ、客席仕様が気にかかる。(倉品) →リズ・カーの「安楽死ミュージカル」のキャパは500強。3,000席のロイヤル・フェスティバル・ホールのメインの客席をつぶし、舞台上舞台として観客席を背にセットを組んだ。舞台背面の上の客席にも客を入れていた。シーラ・ヒルの「ヒム」はロイヤル・フェスティバル・ホールを通常どおり使ったが、閑散としていた。(佐野)
- ・ 障害のある若いリーダーの育成が大切だと感じた。日本にはアーティストとして前例となる人が少ないが、活動の様子を写真で見せるなどモデルを提示して、若い人のモチベーションを高め、次世代を育てていきたい。(倉品) →障害のあるアーティストの育成は重要。知的障害のない身体障害の人の募集が難しい。学習障害の人に振り付けをするには時間がかかる。イギリスのように何十年もの蓄積があり、多くのカンパニーが存在する中で、知的障害のある人も振り付けをやれる環境ができてくるのが望ましい。(伊地知)

(4) 参加団体のコメント

- ・ シアタープランニングネットワークの活動を、対象である福祉施設等にアピールするのが難しい。この研究会でも、共通項と相違点を明確にして、外に伝わるアピールをすると良い。(小川)
- ・ 全国シニア演劇大会で審査に加わった高校生たちは、自分たちはこれまでこんなに素晴らしい演劇を知らなかったと深く感動していた。シニアの演劇を若い世代につなげる、次の展開を考えている。(遠藤)
- ・ 自身の経験から、障害者のパフォーマーの育成においては、自分の障害をどう捉え

るかが大切だと思う。障害を含めた自分の体を意識してアピールするトレーニングを、継続的に行うと良い。(森田)

- ・ 公共の劇場として、演者と制作の間、公共ホールの間でハブになれる組織をめざしている。障害関係の取り組みも進めている。自分にできることを地道にやっていきたい。(澤藤)
- ・ リオで、ブリティッシュ・カウンシル・ブラジルが2012年からアンリミテッドの流れを汲む活動を進めたが、資金難などの問題で、部分的な成果にとどまった。ロンドンのオリンピック・パラリンピックの開閉会式では障害者がディレクターを務め、多くの障害のある人が出演した。2020年にはロンドンを超える開閉会式が求められる。障害のあるアーティスト・団体の皆さんの出番だと思う。皆さんそれぞれの得意分野を生かして、プラットフォーム化、ネットワーキング、関係性の強化など、東京を中心に全国規模で協力して進めていくと良い。2020年に向けて人材をつくり、ノウハウを蓄積して大会以降のレガシーにすることにこそ、意味がある。(栗栖)→プラットフォームについて。劇場などが施策を考えようとしても、情報を見つけにくいのが現状。専門的な協力ができる団体などの情報を整備し、提供できるようにしていくことが必要だと思う。トレーニングや活動の拡大などについて継続的に考えていく場も重要。プラットフォームの具体的な形について、これから考えていかなければならない。次の研究会でどのように話を展開していくか、改めて検討するが、皆さんからもご提案いただきたい。(佐野)
- ・ 障害を持つ当事者を交えて話し合えるこの研究会は、希少な好事例。劇場や行政での取り組みに必ず当事者を入れ、パフォーマンスする側と鑑賞者の双方に必要なことを、当事者の意見を聞いて考える場をつくってほしい。(萩原)

(了)